

〔特集にあたって〕

# なぜ手工芸と開発なのか

金谷美和

## I 南アジア地域の社会変動

本特集の目的は、二つある。ひとつは、手工芸と開発に焦点をあてることで、近年著しい、南アジア地域社会の変動の諸相を明らかにすることである。もうひとつは、南アジアを研究対象とする研究者と、南アジア地域において開発に携わる実践者との協働の試みを示すことである。

近年の南アジア地域研究では、南アジア地域が大きく変動しているという認識に立ち、その変動を理解することを課題のひとつとしている。たとえば、平成一〇年から一四年にかけて行われた文部科学省

科学研究費補助金、重点領域研究「南アジア世界の構造変動とネットワーク——多元的共生社会の発展モデルを求めて」（領域代表 長崎暢子）では、現代南アジアの構造変動を明らかにすることが目指された。<sup>\*</sup>領域代表の長崎は、南アジアの躍動について、インドの例をあげて、一九九〇年代以降経済改革が起り、急速にIT大国化していると述べ、情報化社会へと世界が再編されていくなかで、インドは世界においてどのような位置を占めていくのか注目されていると述べる（長崎 2002）。このような南アジアの変動の背景には、社会、経済活動が国境を越えて地球規模で結びつきを深める現象、いわゆるグローバル化があることは間違いない。

しかし、その変動はIT産業の及ぶ範囲にのみ見

---

られるのではなく、農村にまで及んでいる。経済自由化以降の南アジアの変動は、農村においてはモビリティの増加として捉えることができる。モビリティの増加とは、農村においては、教育や職業の選択肢の多様化に伴い、従来の位階や社会階層から抜け出し、経済的、社会的地位の上昇する人々が増えている現象をさす。このような農村のモビリティが、従来の社会規範や宗教儀礼にまで変容を迫っている<sup>\*2</sup>。最近筆者は、南アジア地域のフィールド調査から戻る研究者たちが、農村の急激な変化に驚き、戸惑っているという感想を述べるのに接する機会が増えた。ネパールの山村から帰国したある研究者は、自分の調査地である村において、所得が増えて消費が増大している、ある種の熱に浮かされたような状況について述べ、村人から「自分たちはすぐに日本を追い越すよ」と言われたと述べた。同じような経験を、筆者も持っている。毎年インドの調査地に行くたびに、各家庭での消費財が増え、生活は便利に快適になっている。そして、何よりも人々がこの経済発展が続くことを信じて、未来を明るく肯定的に捉えていることに強い印象を受ける。日本に帰ってくると、将来への漠然とした不安を喧伝する社会的風潮に、インドの若い世代のエネルギーに満

ちた状況とのあまりの落差を痛感するほどである。

このような農村におけるモビリティは、しばしば農村が地球規模の物や人、情報の流通と直接つながることによって生じている。南アジアの多くの地域においては、このような農村と外部世界とのつながりは、農村開発を契機として始まっている。それは政府の進めるものであったり、あるいは国内外のNGOが主導するものであったりするが、開発を契機として、農村の人々が否応なく、市場経済や国境を越えて共有されているような考え方や価値基準に巻き込まれていくということが生じている。本特集では、南アジアの農村に居住する人々が、地球規模のモノ、人、情報の流通に参入することによって引き起こされる経験のうち、手工芸を媒体とする開発が契機になっている事例についてとくに取り上げる。

それでは、なぜ手工芸と開発なのか。ひとつには、手工芸という対象が、人々の経験のような、目には見えない事柄を可視化する資料となるからである。経験について明らかにするために、人々の語りやオーラルヒストリーを採集することも重要であるが、それだけではその経験を検証したり、あるいは他の地域の人々の経験と比較するための参照軸をつくることは難しい。手工芸品というモノを実証的研

究の資料にするということが、手工芸に注目する理由のひとつである。<sup>＊3</sup>

手工芸と開発に注目する二つめの理由は、従来の研究枠組みでは、異なる領域において対象化され、ときには周縁化されてきた人々を、手工芸と開発という共通項で括ることができるからである。本特集で金谷が論じるのは職能集団であり、かつムスリムである。農村においてジャジマーニー関係<sup>＊4</sup>を持たない職能集団は、農村研究の対象にならず、またムスリムはインドのムスリム研究のなかで論じられがちであった。上羽が論じるのは牧畜民である。南アジアの牧畜民研究はまだ蓄積が浅いといわざるをえない。松村、五十嵐の各論が論じるのは女性であり、南アジア研究の文脈では、女性はジェンダー研究のなかで主に扱われてきた対象である。手工芸を媒体とする開発の対象となった人々は、社会の周縁的な存在として研究の対象になりにくかった。あるいは、研究の対象となっていたとしても、それぞれが従来の研究では異なるカテゴリーのなかで研究されてきたといえる。手工芸と開発という枠組みを与えることによって、従来の研究では見落とされがちであった対象に光を当てるだけではなく、異なる領域で対象化されてきた人々を比較する視野をひらいた

ことが、本特集の特徴であるといえる。

手工芸と開発に注目する三つめの理由は、南アジアの手工芸と開発は相互に関連しながら農村に根付いていったという歴史的経緯があるからである。南アジアでは近年まで、生活道具の多くは、農村の素材を用いて職能集団によって生産され、ローカル社会のなかで流通し、使用されたか、あるいは家庭内で自家用としてのみ生産されてきた。たとえばインドでは、土器作り、織工、木工、鍛冶屋などの職能集団はカースト・システムに組み込まれて農村経済を支える存在であった。ローカルな需要が減少し、手仕事による生活用品の生産が衰退したとき、それらを「手工芸」と名付けて、新しい市場の開拓を図って地場産業の復興を行ったのが、政府やNGOによる手工芸開発である（金谷 2007）。

そして、手工芸と開発に注目する四つめの理由は、日本で販売される南アジアの商品のなかに、フェアトレード商品をはじめとする開発によって生み出された手工芸商品が年々増加しているということである。南アジアの手工芸商品は、多様な経路で日本に入ってきている。かつては、エスニックショップと総称される、アジアやアフリカのアクセサリー、雑貨などを専門に販売する店が主であったが、近年

では、より多様な場所において、南アジアの手工芸品を見ることが出来る。そのひとつが、フェアトレード商品である。

フェアトレードとは、長坂によると、開発途上国の生産者と先進国の消費者とが、対等なパートナーシップ（協働関係）を結んで直接取引することで、収益だけを目的とした従来の貿易とは異なり、生産、流通、消費に関わるすべての人に「人間らしさ」をもたらし、地球環境と生態系を慈しみ守る視点に立った、「オルタナティブ・トレード（新しいもうひとつの形の貿易）」を追求することだという（長坂2008:4-5）。

日本には江戸時代にインドで生産された「南蛮更紗」が輸入されていたことにも見られるように、南アジアの手工芸品の日本での流通には古くからの歴史がある。現在の南アジアの手工芸品が南蛮更紗と異なるのは、近代以降のグローバル化のなかで、手工芸品というモノだけでなく、生産者や生産地の情報も大量に運んでくれることである。これも、南アジア地域の変動であろう。農村の生産者の情報が直接日本の消費者に届けられるということは、フェアトレードによる商取引が、単に商品を販売するだけでなく、商品の生産者の情報についても消費者に届

ける努力をしていることからわかる。

本特集では、「実践の現場から」で取り上げる小松、高田、水野の三氏がフェアトレードに関わっている。小松は、バン格拉デシュとネパールにおいてフェアトレードの開発を行い、水野はフェアトレード商品を販売する店舗を経営しながら、日本の消費者にフェアトレードを浸透させようと試みている。

高田は、バン格拉デシュにおいて日本の青年海外協力隊員がフェアトレード商品の開発に携わってきたという事実を教えてくれる。南アジアの社会変動を、日本にいる私たちの側から捉えようとしたときに、商品として入ってきている手工芸品は南アジアと日本の関係を具体的に考える媒体となる。本特集は、開発やフェアトレードの是非を問うことが目的ではない。グローバル化の流れは止めることはできないし、手工芸品が狭い経済圏で生産・消費されていた時代に逆行することもないだろう。手工芸商品は、日本人が南アジア地域の生産者を持つ関係のひとつであるともみならず、今後ますます増加することが予想される地球規模の経済ネットワークの広がりのおかげで、私たちが南アジア地域とどのような関係を持つべきなのかについて、本特集はひとつの将来像を提示することに寄与すると考えている。

## Ⅱ 研究者と実践者の対話

本特集の目的のひとつは、手工芸と開発に焦点を当てて、南アジア地域社会の変動の諸相を明らかにすることであり、もうひとつの目的は、南アジア地域の研究者と、南アジア地域において開発に携わる実践者との協働の試みを示すことであると述べた。

それはとくに、本特集の最後に位置する、南アジアの手工芸と開発というテーマで行ったワークショップをもとにした部分に示されている。<sup>\*5</sup>このワークショップは、手工芸と開発に関わる研究を行っている研究者と、南アジアの開発に実際に取り組んでいる実践者とが、それぞれの知見を交換し、協働の可能性を探るという目的で、筆者によって企画されたものである。このワークショップは、対話が協働のひとつの方法であること、研究者と実践者の二分を越えた地域研究のあり方についてなど、当初の目的を超える、刺激的な問いを投げかけるものとなった。そのような成果が得られたのは、このワークショップが、研究者と実践者の対話（ダイアローグ）を重視したからであると筆者は考えている。ワーク

ショップはまず、三人の実践者の話題提供から始まった。話題提供に対して、質問が投げかけられ、それに対して応えるという応答がなされるなかで、発表者の提供した話題を超えたテーマが広がっていった。それは、決して研究者が実践者から、実践に基づいた情報を引き出す（搾取する）というような、一方向的な「情報提供」というものではなかった。

ワークショップの企画当初、「対話」という形式は、単に方法として選び取られただけであった。「研究発表」という形式やアカデミックな手続きを踏んだ議論では、互いの経験に基づいた生々しい話ではでないだろうと考えたからである。しかし、実際にワークショップを行ってみると、単に知見交換の方法としかみないなかつた「対話」が、まさに「協働」そのものであることが明らかになっていった。互いが相手の知見を得よう、利用しようという態度ではなく、研究者も実践者も理解でき、共有して利用できるような知見として精緻化しようという意図が明確に表れた、いわば知的な饗宴であった。異分野の者同士が対話をする中で、歩み寄ろうとしたからこそ、互いに思ってもみなかった興味深い指摘が生まれた。研究者自身も、研究の方向性として重要なポイントを得たし、実践者にとっても、今後の活

動において心にとめたいポイントが得られたであろう。当日の「対話」は実践者にとっても、研究者にとっても、刺激的なパフォーマンスとなったのである。後に述べるように、この対話の臨場感を残すために、あえて発話体を残して編集がなされている。

さらに、筆者はワークショップのテープ起こし原稿を何度も読み直し、編集作業を行うなかで、ワークショップの企画当初に想定していた実践者と研究者という二項対立を超えた研究者の立ち位置があるのではないかと考えるようになった。そしてその認識は、ワークショップにいたる経緯とも関連がある。この特集にいたるまでの経緯を少し説明したい。

筆者と中谷純江は、二〇〇八年一〇月から翌年三月まで国立民族学博物館において開催された、企画展『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクシオンに見る手仕事の世界』に副実行委員として携わった。<sup>\*</sup>この展覧会は、インドで三〇年以上にわたり手工芸生産者を支援してきた開発アクターであるB・B・バシン氏の蒐集した刺繍布を、彼の仕事とともに紹介するというものであった。バシン氏が自分のコレクシオンの一部を手放したいと相談したのが、バシン氏の親友の学生であった中谷である。中谷は筆者にその話をし、二人で動き出したのが

二〇〇三年のことであった。

中谷と筆者は、バシン氏のコレクシオンを国立民族学博物館の収蔵品の一部として受け入れる橋渡しをし、展覧会を企画するために手弁当で奔走することになった。中谷と筆者は、インドのバシン宅に滞在しながら、刺繍布を一点一点調査し、データベースを作成した。コレクシオンは、彼の手工芸開発の仕事を中心としたライフヒストリーを語ってくれるものであることがわかり、生産者にどのように関わり、支援していったかについてバシン氏にインタビューを重ねた。

じつは筆者は以前からバシン氏と研究上の関わりがあった。筆者は、インド西部グジャラート州カッチ地方で、染色を生業とする職能集団カトリート、その生産物である染織品の研究を、一九九八年より行っているが、筆者に、カッチ地方というフィールドを紹介してくれたのはバシン氏であった。この地方は伝統的な染色技術が存続していたために、筆者は研究に適したフィールドに巡り会えた幸運に感謝していた。しかし、研究を進めるうちに、技術が存続している背景には、政府やNGOによる手工芸を対象とした開発があり、一九七〇年代以来のバシン氏らの尽力があったことが明らかになった。インド

---

で職能集団やその生産物である染織品について研究するためには、開発を無視することはできなかったのである。それまで、筆者は開発を否定的に捉え、距離をおいていたが、バシン氏という個人が、カッチ地方の生産者を行った仕事の足跡を見ることで、開発とは個人対個人の関係であるということを確認するようになった。つまり制度としての開発というものの方がローカル社会に覆い被さるのではなく、個人の顔を持った開発アクターと、やはり顔を持った支援される側の生産者とのやりとりがあるのだということである。

このときの調査地での発見が、バシン氏に対するインタビューに結びつき、展覧会の展示内容に生かされることになった。このような調査を行いながらも、中谷と筆者は、最初この仕事を研究であるとはみなさず、バシン氏への個人的な恩返しであり、インドという研究フィールドへの社会的還元であると位置づけていた。

しかし、研究と実践は分けられるものであろうか。展覧会企画にいたる二人の仕事は、実践であり、かつ研究でもあるといえるのではないだろうか。バシンの蒐集品が収蔵された後、改めて刺繍布の調査が行われ、展覧会の展示内容は実行委員たちの研究

---

成果を踏まえた充実したものとなった。

人類学者や地域研究者にとつての実践とは、単に研究対象や地域への還元だけではない。筆者は、研究者による実践が、自分の調査地であるフィールドへの直接的な還元であるべきだという思い込みを外し、研究者の実践をより広く捉える試みとして、展示製作を、実践のフィールドをひろげる「場（フィールド）」と位置づけたい。展覧会は、まさに研究と実践の間を往還しながら地域研究を行う方法のひとつであった。

研究対象である南アジアの「フィールド」と、研究者の居住する「ホーム」が、物理的にも、また情報や人、モノの流通の点でも距離が近くなっている現在、研究と実践は分かちがなくなっている。研究者は「ホーム」に戻っても、「フィールド」との縁は切れないのである。そのような「フィールド」と「ホーム」との関係性の変化のなかで、あえて「フィールド」に巻き込まれるような研究のあり方を志向するという研究者の立ち位置はあり得る（李・金谷編 2009）。このような経緯のなかで、ワークシヨップは企画され、さらに本特集に結実したのである。

中谷は本特集論文で、インド手工芸開発の歴史をバシン氏という個人の視点から描くことを試みた。

中谷が、多数の開発アクターのなかでとくにバシン氏を選択したのは、中谷が個人の顔を持つ開発アクターに焦点を当てることを目指したからである。中谷は、バシン氏と知己であるからという安易な理由でバシン氏を書くことを選択したわけではなく、他の誰でもない、彼だからこそできた仕事であることを明らかにしようとしたのである。

ワークシヨップでの発表とデイスカッションでは、研究者と実践者の協働のひとつの例を示すことができたと自負している。ただし、情報のアウトプットに関して研究者と実践者がどのように協働できるかということについては、アイデアの芽のようなものは得られたが、議論が尽くされたとはいえない。この芽を育てていくことが課題である。

### Ⅲ 本特集の構成

各論は、五本からなっている。<sup>\*7</sup> 中谷の論文はすでに述べたように、開発アクターであるバシン氏について論じている。金谷、松村、上羽の論文は、開発の支援を受けた生産者が、どのように対応し、生産活動を変化させていったかについて論じている。い

ずれも、生産者にとつての開発の是非を論じるのではなく、開発が従来にはなかった情報やネットワークをもたらし、あくまでも生産者の選択の結果として生産活動が変化したことを示している。金谷は、インドにおいて手工芸開発を受けて企業家的に生産形態を展開させた事例として、更紗生産者について論じた。松村は、手工芸開発によってカラムカリという染色技術を身につけた女性たちが、技術職としての「職業」を考える立場にたつことに喜びと自信を持つようになっていると論じている。上羽は、牧畜民女性たちがNGOによる商品製作を行うことに気が進まない理由を、彼らの物作りへの態度や考え方から明らかにしている。五十嵐は、バングラデシユのNGO商品について論じている。本特集は五本の各論のうち、四本がインドの事例であり、バングラデシユの事例は五十嵐の論文のみである。五十嵐論文は、バングラデシユにおいて従来は貧困と結びついた刺繍布が、芸術家らによって文化や民俗芸術として評価され、さらにNGOによって商品化され、国際市場に流通するようになったことを論じ、

インドや他の地域との比較の視点を提示している。各論の次に、「実践の現場から」として、南アジアの開発に携わる実務者の実践について論じた。こ

これは南アジアの開発に携わる実務者と、南アジアを研究対象とする研究者とが行ったワークショップを元に行っている。話題提供者は、特定非営利活動法人

シャブラニール市民による海外協力会の会、クラフトリンクの小松豊明、染織家で元青年海外協力隊員（バングラデシユ／手工芸）の高田京子、フェアトレード商品を販売するシサム工房代表取締役の水野泰平の三人である。小松は、ネパールとバングラデシユにおいて、現地のNGOと協力して、現地の素材や技術を活用した商品開発、日本での販売を行っている経験を踏まえて、商品開発とマーケティングというテーマで論じた。高田は、バングラデシユで青年海外協力隊として活動し、最も成功した手工芸商品のひとつであるココナツのボタンを開発、その後バングラデシユのNGOと関わり続けている経験、また自身が染織作家である経験を踏まえて、生産者の側からみる商品開発というテーマを論じた。水野は、フェアトレードの小売店を経営すると同時に、タイなどの現地NGOと協同して、フェアトレード商品の開発も行っている経験を踏まえて、生産者と消費者をつなげる、というテーマで論じた。討論に参加した研究者は、鹿児島大学の中谷純江、福岡アジア美術館の五十嵐理奈、国立民族学博物館

の上羽陽子、筆者の四人であった。この四人はいずれも各論の執筆である。

「実践の現場では」はワークショップの内容を収録しているが、これは再録ではなく、筆者の視点による論考の一種であるということもできる。単なる情報交換の手段ではなく、研究者と実践者の協働そのものであったワークショップから得られた果実を、対象とするフィールドや学問領域、研究者と実践者の間の垣根を越えて幅広く共有してもらうことに意味があると考え、まとめなおしたものである。

その際留意しておきたいことは、発話であるからこそ、断定して話せること、そしてそれを活字にして残すときの方法には注意を払うべきだということである。発話だからこそ、研究者側がまだ実証されていないことをあえて断定的に話し、そのことで、実践者によく伝わり、対話が活性化された面がある。筆者が研究者の立場で対話を文章化すると、そのような断定的な言い方は削除せざるをえない。対話形式をあえて一部残したのは、対話というパフォーマンスのなからテーマが生まれてきたことをより重視したかったためである。

本特集では、南アジアにおいて本特集のテーマに関わる研究蓄積が少ないなか、インド、バングラデ

シユ、ネパールの三カ国について論じることができた。とはいえ、このような手工芸品をめぐる現象は南アジアに限らず、世界的に同様な状況が生じていることを観察することができる。南アジアの手工芸に注目することは、南アジア地域を世界の他地域との比較や関連で捉える視座を提供すると考える。手工芸と開発というテーマは、まだ端緒にいたればかりである。今後、このテーマに関心を持つ人が増え、さらに議論を展開していくことを願って、本特集を問題提起としたい。

●注

- \*1 その成果は、『現代南アジア』全六巻(二〇〇二-二〇〇三年、東京大学出版会)として出版されている。
- \*2 たとえば中谷(2006)は、カーストの位階にしたがって行われていた従来の村落における宗教儀礼が衰退し、平等性が志向される巡礼がさかんに行われるようになっていくことを明らかにしている。
- \*3 手工芸の研究については、以下のものがある。手工芸品のナシヨナリズムの装置としての役割(金谷1996; Greenough 1995)・エスニシティの表象としての手工芸品(Gaburn 1976)・市場経済や消費社会の台頭で変化する手工芸(Samall 1998)・ツーリズムの隆盛とツーリズム文化の創出(Gaburn 1976; 濱田2006)・グローバルに流通する手工芸品(Jain 1995;

MacGuckin 1997) など。また、インドの農村社会において、衣服とそれに施された刺繍の技術やデザインの変化に注目することで、農村のカースト間関係、カースト内の社会関係の変化を明らかにした(Taru 1996) などの研究がある。

\*4 ジャジマーニー関係とは、バトロン・クライアント関係とも呼ばれ、ヒンドウーの村落における諸カースト成員の世帯間での、それぞれの伝統的な職業に基づくサービス提供と、それに対する報酬支払いとの相互関係である。儀礼的な義務を伴うことも多い。

\*5 地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ『南アジアの手工芸開発——「布」からみる地域社会の変動』(代表 金谷美和)、二〇〇八年二月九—一〇日。

\*6 実行委員長は三尾稔氏。実行委員は、筆者と中谷のほか、杉本良男氏、鹿野勝彦氏、上羽陽子氏。また、同名の書籍を昭和堂より出版した。

\*7 これらの論文は、日本南アジア学会研究大会テーマ別セッション『南アジアの手工芸・開発・布——南アジア社会の変動をみる』(代表 金谷美和、東洋大学、二〇〇八年九月二七日)をもとにしている。

●参考文献

- 李仁子・金谷美和編(2009)『自己言及的民族誌の可能性』東北アジア研究センター叢書第三四号、東北大学東北アジア研究センター。
- 金谷美和(1996)『文化の消費——日本民芸運動の展示

をめぐって』『人文学報』七七号、六三―九七頁。

金谷美和 (2007) 『布がつくる社会関係——インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版。

金谷美和 (2008) 「インド手工芸開発の歴史——手仕事の担い手を支えた人々」三尾稔・金谷美和・中谷純江編『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂、八二―八六頁。

古賀正則 (1999) 「インドのNGOの現状と課題」『駿台史学』一〇七号、一一五〇頁。

中谷純江 (2006) 「コミュニティ祭礼の変容——Randeora 巡礼にみる平等性への志向と拡散する権力関係」三尾稔編『北・西インドにおける都市型祭礼の変容に関する文化人類学的研究——経済自由化、宗教ナショナリズムと宗教実践との相互連関の民族誌的把握を目指して』(科学研究費補助金研究成果報告書)、一〇三―一三三頁。

長坂寿久 (2008) 『日本のフェアトレード——世界を変える希望の貿易』明石書店。

長崎暢子 (2002) 「序章南アジア研究の課題と方法」長崎暢子編『現代南アジア——地域研究への招待』岩波書店、三―二四頁。

濱田琢司 (2006) 『民芸運動と地域文化——民陶産地の文化地理学』思文閣出版。

三尾稔・金谷美和・中谷純江編 (2008) 『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂。

Graburn, N.H.H. et. al (1976) *Ethnic and Tourist Art: Cultural Expression from the Fourth World*. Berkeley: University of California Press.

Greenough, Paul (1995) Nation, Economy, and Traditional Displayed: The Indian Crafts Museum, New Delhi. In Carol A. Breckenridge (ed), *Consuming Modernity: Public Culture in a South Asian World*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Jain, Jyotindra (1995) Adivasi Art--Tribal and Folk Art: Art versus Craft versus Commerce. *Art and Asia Pacific Quarterly Journal* (Australia) 2(1): 72-81.

MacGuckin, Eric (1997) Tibetan Carpet: From Folk Art to Global Commodity. *Journal of Material Culture* 2: 291-310.

Samal, Bonani (1998) Applique Craft in Orissa, India: Continuity, Change, and Commercialization. *JASO* 29(1): 53-70.

SURTI (1995) India's Artisans: A Status Report, SURTI (Society for Rural, Urban and Tribal Initiative).

Tarlo, Emma (1996) *Clothing Matters: Dress and Identity in India*. New Delhi: Viking Penguin Books.

(かねたに・みわ／国立民族学博物館)